



羽藤由美

はとうゆみ

京都工芸繊維大学 教授

(応用言語学)

1992 年 11 月,
'M.A. in Education (TESOL), University of London,

1994 年 4 月～1997 年 3 月
富山県立大学 助教授

1997 年 4 月～2006 年 3 月
福井県立大学 助教授

2006 年 4 月～, 京都工芸繊維大学 教授

単著として『英語を学ぶ人・教える人のために―「話せる」のメカニズム』(世界思想社、2006 年)、共著として『検証迷走する英語入試―スピーキング導入と民間委託』(岩波書店、2018 年)等。

11 月 25 日 (月) 17:30 ~ 19:00

本部キャンパス 総合研究 2 号館
3 階北側 法科第 2 教室



<https://goo.gl/maps/pVspa8b5swvsXmhg9>

大学入学共通テストの導入が大きな社会的注目を集めています。英語民間試験の導入と国語・数学における記述式問題の採用が「改革」の目玉とされてきましたが、高校生や高校教師が中心となって地域や経済力による格差を指摘する中で、英語民間試験は必須のことではなくなりました。国語・数学における記述式問題については文部科学省が 61 億円でベネッセに採点業務を委託することになりましたが、学生アルバイトも利用しての採点で公正・公平を保つことができるのかという疑問が噴出しています。英語について、京都大学は民間試験の成績を「出願資格」の判断に利用するとしていましたが、その方針に問題はなかったのか、考えてみる必要があります。11 月 29 日 (金) には各国立大学が 2021 年度入試の変更点を改めて公表することになっています。京都大学はどのような判断をすべきでしょうか？

そもそもなぜ、このような入試「改革」がおこなわれたのでしょうか？導入をめぐる手続きはどのようなものだったのでしょうか？英語を「話す」「書く」能力や思考力を養成することが大切だとして、それを実現するために本来ならばどのような入試改革が望ましいのでしょうか？

講師としてお招きする羽藤由美先生(京都工芸繊維大学教授、応用言語学)は、国会でも参考人として意見陳述され、「国立大学は若者を犠牲にすることに加担するな―迷走を続ける英語入試改革の現状」(『岩波書店 科学』2019 年 9 月)などの論考を発表されています。Twitter では「絶望の極みは、入学者選抜の実施主体である大学の教職員の多くがこの問題に無関心であること」とつぶやかれてもいます。たとえ遅ればせながらも、「無関心」を克服し、実施主体としての責任を感じることのできる場としたいと思います。

入場無料・事前予約不要

普段のミニ講義は、お昼休みに 15 人前後の組合員が集い、昼食をとりながら教員組合員の研究の話題を聴くというスタイルで実施しています。「オープン企画」は、広い意味で組合活動と大学の社会的信用にかかわる問題について、組合員の方はもちろん、組合未加入の教職員、学生、市民どなたでも参加できます。たくさんの方のご来場をお待ちしています(「オープン」という趣旨を生かすために組合未加入の方を勧誘したり、お名前をうかがったりはいたしません)。

京大職組の

ミニ講義

オープン企画

どなたでもご自由にご参加できます

「大学入学共通テスト、その何が問題か？」